

【平成24年度】

～「水が織りなす安曇野今昔物語」講座～

～第4回～

庶民信仰編

「豊穰の地に花ひらいた民間信仰の諸相」



水色の時道祖神

と き : 平成24年8月22日(水) 午後7時から

場 所 : 穂高交流学習センター「みらい」

講 師 : 高原 正文 氏

講師プロフィール

高原 正文 氏（たかはら まさふみ）

信濃史学会評議員。元豊科町郷土博物館長。

1952 年(昭和 27 年) 生まれ。安曇野市豊科新田出身。現在は豊科成相見岳町に居住。

1979 年(昭和 54 年) 豊科町に博物館学芸員として採用され、長らく豊科町郷土博物館等の学芸員を務め(専門:民俗学、美術史)、「日本名刀展」「地籍図展」「南安曇の道祖神展」などの特別企画展を次々に企画・開催した。

1992 年(平成 4 年) 豊科町誌編纂委員に委嘱され『豊科町誌』の執筆、編集に携わった。

2003 年(平成 15 年) 4 月から 1 年間、豊科町郷土博物館の館長として豊科町が生んだ社会派映画の巨匠熊井啓(豊科町名誉町民)の顕彰事業に専念した。

2010 年(平成 22 年) 信濃史学会定期総会で「安曇野市中心市街地の近代史」を研究発表。

著書『安曇野史への招待』(信毎書籍出版センター) (単著)

『長野県民の戦後六〇年史』(信毎書籍出版センター) (共著)

『生活環境の歴史的変遷』(雄山閣) (共著)

『大町安曇の今昔』(郷土出版社) (共編著)

□概論 安曇野の民間信仰の傾向

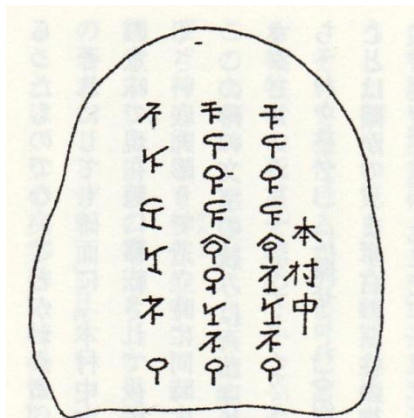
- (1)盛んな道祖神祭祀と近年における道祖神祭祀の観光化
- (2)大黒信仰と恵比寿信仰の共存が確認できるが、恵比寿の碑が極端に少ない。
- (3)観音信仰が盛んだった。馬頭観音造立の多さ、幾種もの観音霊場札所の設定。

□民間信仰の諸相

1. 道祖神 安曇野の民間信仰の代表格

(1)複雑多義な道祖神信仰

①塞神の要素 ー神代文字碑からさぐる



塞神塔(庚申塔の一種)から道祖神に転化した神代文字碑



神代文字碑が立つ本村大日堂前(豊科)

○神代文字碑の碑面に彫られた「ヤチマタヒコノカミ、ヤチマタヒメノカミ、クナトノカミ」の名は『延喜式』祝詞「道饗祭」に出てくる塞ぎの神の名。この神代文字はハングルに似ているが全く違う。斎藤彦松調査。阿比留文字といい神官阿比留氏の呪文文字。平田篤胤『神字日文伝』。

○近世、本村庄屋丸山家の屋敷神として赤蓑騒動犠牲者の鎮魂の碑〔私物〕だったが明治末年(又は大正)頃丸山家から近くの大日堂前へ移転され道祖神に転化、「本村中」と刻む〔村の共有財産〕。

②行路神(道の神)の要素



文字碑(豊科熊倉)



文字碑と双体像(豊科新田神社前)

○「道祖神」の「道」の字はもともとは「行」の字の真ん中に「首」を挟んだ字である。

○旅人の道中、道にはいろいろな魍魎魍魎(ちみもうりょう)が潜んでいる。旅人の無事を祈る。

③性神(生産神)の要素



自然石「子宝の神」(松本市里山辺北小松八坂神社) 自然石と双体道祖神 (松本市梓川八景山)

○石増殖の霊力への畏怖→「さざれいしのいわおとなりて苔のむすまで」。まして男女に酷似した自然石であれば、その霊力は半端ではなかった。特に山間の顕著な例。

○夫婦和合の祈り 近世「結婚」は憧れだった。「夫婦」になれたことに感謝、絆を大切にする。

○子宝授かりの祈り 近世「嫁して三年、子なきは去る」という暗黙の不文律があった。

○人は災害、飢饉、疫病などで、どんどん死ぬ。だからそれに負けずにどんどん産まないと村自体がたちゆかない。天明の飢饉時に松本入山辺宮原で裸体男女の愛情場面を入れた道祖神を造立。

○植物への共感呪術→人間の性行為が植物の霊を刺激し、その受精活動を促進させ「五穀豊穰」につながる(共感呪術についてはフレイザー『金枝編』参照)。「五穀豊穰」が年貢(松本藩の税制は戸田<松平>氏の元和年間以降、豊凶無関係の定免法。出来高による検見法でない)の重さに負けない村の強い経済体質を形成する。○強烈な性の力は災厄、悪霊を塞ぐ強烈な霊力をもつ。

④不老長寿を叶える神の側面



菊花紋道祖神 (弘化3年 豊科本村西村)

神殿の懸魚に菊花の双体像(天保10年 穂高等々力)

○菊の呪術→重陽の節句「菊の被綿」、謡曲「菊慈童」

○道祖神が盛んに建てられた近世後期の平均寿命は 46 歳程度(乳幼児の死亡率の高さも起因)。

⑤地蔵尊的な要素

○地蔵和讃にあるように地蔵は子どもたちの味方。本地垂迹説では道祖神の本地仏が地蔵菩薩であるので二つのものは表裏一体。関西では道祖神祭りにかわるものとして地蔵盆が子どもたちによって営まれる。

(2)道祖神祭祀の基本事項

①原則「木戸」ごとの祭祀。まれに個人の祭祀もある(〇〇氏として道祖神を造立)。

②碑自体がご神体 庚申塔のような「供養塔」ではない。庚申塔などは碑(塔)がないところにも庚申講があるが、道祖神の場合、碑のないところに信仰はない。

③碑の位置 中世には村の境界の路傍に立てたが、近世には道の辻に立てる。

④道祖神祭りの主体 お彼岸や春の祭り(化粧など)・夏祭り・三九郎(どんどやき)は道祖神仲間の子どもたちである。御柱立ては「木戸」が総出で行うため大人が主体となる。

⑤一生関わる神 「宮参り」のとき先道祖神にお参りし「氏子にしておくんなんさんし」とウツギダルを供える→はしか・疱瘡から守る→道祖神仲間の子どもとして道祖神の祭祀に奉仕→美しい娘に成長するよう親が祈願→良縁祈願→若衆による番持石の力比べと道祖神盗みによる模擬略奪婚→夫婦和合→子宝成就→五穀豊穰の祈り→村繁栄の祈り、災厄を防ぐ祈り→夫婦長寿の祈り

(3)道祖神碑の種類

①像碑

○単体像 安曇野には事例なし

○双体像 男女二神が並び立つ。安曇野に全国的にも有名な美しい道祖神の多い理由は何か。

a.握手像(肩抱きのものが多い) b.酒器像(祝言像) c.祝言跪座像(酒器像<祝言像>のひとつ)

d.笏軸像 e.笏扇像 f.その他 接吻像など a から e の範疇に入らない固有な像

②文字碑 ③像碑と文字碑の混合型→通常、像碑として扱う。

※自然石については、人の手が加わっているわけではないので、石造文化財の「碑」には加えない。

(4)道祖神碑各地区の道祖神の数・事例と碑から読み取れるもの

①明科 146 基 (出典:『明科の石造文化財』。同書追加の菅田の自然石道祖神を除く。H24 に菅田調査)



接吻像 (年不祥 池桜)



握手像 (万延元年 塔の原)



自然石と握手像(平成 16 年 荻原菅田)

②穂高 127 基（祭祀対象でない新道祖神を除く。出典:石田益雄『道祖神をたずねて・穂高・』）



握手像（弘化3年 牧山崎）



酒器像（元治2年 有明耳塚）



酒器像（慶応2年 神田町）

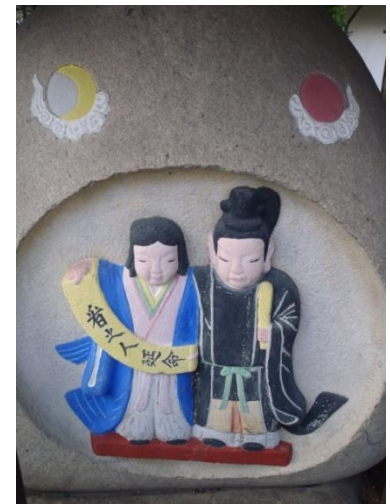
③豊科 135 基（祭祀対象でない新道祖神を除く。出典:『豊科町誌 歴史編・民俗編・水利編』）



文字碑（弘化4年 本村本郷）



酒器像（安政5年 下中曾根）



笏軸像（慶応3年 踏入本郷）

④堀金 67 基（祭祀対象でない新道祖神を除く。出典:石田益雄『道祖神をたずねて・豊科・堀金・』）



酒器像（嘉永2年 中堀清兵衛木戸）



祝言跪座像（天保4年 中堀中木戸）



握手像（天保14年 扇町）

⑤三郷 75 基（出典:三郷村誌編纂委員会『増補改訂 三郷村文化財地図』）



肩抱き抱擁像（寛政 11 年 藤ノ木）



握手像(寛政 5 年 下長尾)



祝言跪座像(慶応 4 年 北小倉上手木戸)

(5)さまざまな道祖神祭り

①三九郎(どんどこやき)



三九郎と子どもたち（穂高倉平）



燃えさかる三九郎（豊科徳治郎）

○道祖神の火祭り。市内各地で正月 7 日を中心に行われている。年頭の厄を焼き払い、新年の寿を言祝ぐ。もともと道祖神仲間(子供組)の主宰であったが、近年は子ども会育成会の行事化。

○三九郎の囃し歌の例「三九郎、三九郎、かかさのべっちゃんちょうだ。まわりまわりに毛が

生えて、中がちょっとちょぼくんだ。ワッワノワー」(『豊科町誌』)。キリスト教徒相馬黒光が安曇野を去った理由のひとつが三九郎の囃し歌に代表される土俗性だったという。

②道祖神御柱



道祖神御柱 (三郷一日市場東村)

道祖神御柱 (穂高倉平)

道祖神御柱 (堀金田尻南木戸)

○正月の道祖神祭りで規模が大きく、地区ごとに形態が違い華美。神招ぎの要素が多い。

○目的:疫病除け、五穀豊穰、子孫繁栄、長寿祈願のために行う (一日市場 百瀬和久氏談)

③奉納型の祭り



道祖神祭り (豊科中曽根夫領)

道祖神祭り (豊科踏入恵光院)

道祖神祭り (堀金田多井下村)

○七夕時分に行うところ、春の彼岸に行うところなど。化粧道祖神の風習も。

④山車曳行 三郷楡、上長尾で8月14日に道祖神の山車を曳く。盆の行事とも見なせる。

⑤福俵曳き 豊科の成相・新田に伝わる小正月の道祖神祭り。御柱倒しの朝、俵をはずし、祭り奉仕の青年たちが市中を曳行し練る。御柱についていたので神の依代として「だし」(神霊降臨の目印)というが、俵を「山車」として曳くという意味では、一種の「風流」(ふりゅう)とみなすことができる。曳行の途次、人間ピラミッドなどの寓意的な所作がある。最後は俵奪い合いの綱引きが行われ、前年慶事があった家へ奉納される。举行日は毎年、飴市の二日目に行う。

2. 庚申 庚申講は宗教に名を借りたコミュニケーションの場であり相互扶助の役割果たす

(1) 庚申信仰の意味と講

□庚申信仰は干支(えと)の庚申(かのえさる)の日を禁忌として、その日の夜に庚申(仏教的には青面金剛、神道からすれば猿田彦)を祀り、徹宵をする行事で、庚申講はその信仰仲間のことであり行事のことである。

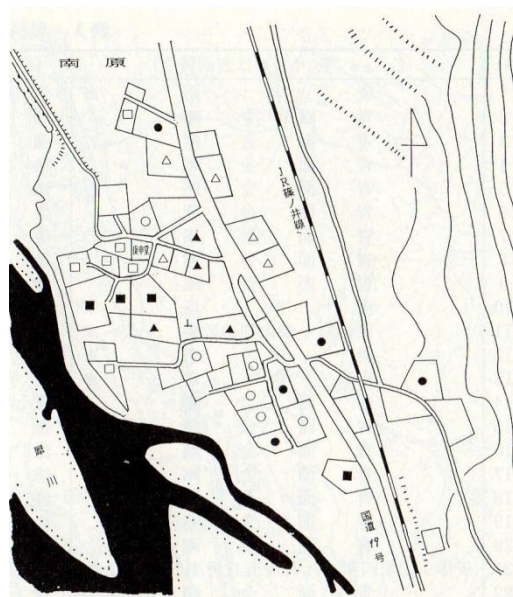
庚申の日は六十日ごとにめぐってくるが、この日が禁忌であるいわれは、中国の道教の三尸説に求めることができる。それによると、人間の体の中に三尸虫という虫がおり、人間が寝ている間に体から抜け出して天に昇り、天帝にその人間の罪過を告げ口して人間の早死をたくらむので、庚申の日の夜は寝なければ三尸虫に抜け出す機会を与えない、というものである。そのために庚申の日の夜、寝ないで夜あかしをする。これを「守庚申」というのである。この夜あかしの実体は勤行、飲食、歓談を中心とする。

庚申講は、信仰に名を借りた集会の組織であり相互扶助のためにあるが、地域の六～八戸、多い場合には十五戸程度から成る。講は年六回の庚申の日の夜ごとに行うところと最初と最後の庚申の日の夜だけ行うところ等がある。初回を初度といい、最後の回を終度(仕舞度)という。また庚申の日(定日)以外に行うものを間度といい、定日のものである本度と区別している。間度がある場合は年六回の当(頭)屋を順番で回すのに講員が八戸であるため年二回の間度を設けて当屋を一巡させるというつごうによるのである。年六回の場合、農繁期にかからない初度と終度が重視されたが、大正十二年刊行の『南安曇郡誌』の「庚申講」の項には「庚申講=隔月庚申の日に行われ、上野庚申に参詣するもの多し。特に最初と最終とは甚だしき賑わいにて付近の露店にては風車、跳ね猫、菓子等を商う。参詣者は東筑、北安にも及ぶ。又各所に御庚申講なるものありて、この日相会し念仏を唱え終りてく話は庚申の晩に>とて遅くまで四方山の話となす」と書かれている。この背景には初度に当たった者は上野庚申(旧梓川村上野の真光寺)へ代参する場合が多かったことと、初度に当たると口が増え(子どもが生まれ)金がたまるとか終度に当たると福神が来るという伝承も関係する。

庚申講の目的としては、困った時の相互扶助のための講ということで、庚申無尽をしたり、共同で使用する葬儀用の什器等を買うための積み立てをしたり、葬儀の時には庚申仲間がこぞって手伝いをしたものである。(『豊科町誌 歴史編・民俗編・水利編』所収の小稿による)



庚申塔 (豊科真々部)



庚申講組織の例 「五戸」と「十戸」(豊科田沢南原)

(2)庚申塔

□庚申塔は道祖神碑とは異なり「供養塔の一種であって、道祖神の如く一つの祭祀対象として最初からあったものではない」（『農村信仰誌〈庚申念仏編〉』）。事実、庚申塔のないところでも庚申講はあり、道祖神碑のないところに道祖神講がないのとは異なる。

碑は文字碑と像碑とがあり、文字碑は庚申塔であることを示した程度のものと「南無阿弥陀仏」の名号まで刻んだものと二系統ある。像碑はすべて青面金剛を刻む。青面金剛は病気を除く鬼神とされるが、庚申の本尊として祀られる段になると多様な性格を帯びるようになる。旧豊科町内ではお庚申様といえば「農作の神様」という地区が多い。この青面金剛の像碑の場合、上方に日輪と月輪、下方に二鶏と三猿を配したものが多い。日輪・月輪は「農作の神様」と関係し、「日月清明、風雨順時、五穀豊穰、天下太平」という近世農民の願望を寓意。二鶏は、庚申の日の徹宵が翌日の一番鶏が鳴くまで行われるから、とか、申の日が明けると酉の日だから、とかの理由で描かれる。三猿については「見ザル、聞かザル、言わザル」の身を慎むしぐさをしているが、それは三尸虫を猿に見立てて天帝に報告させないため、という（庚申懇話会編『日本石仏事典』）。また猿は猿を神使とする山王権現が庚申信仰と習合していた頃の影響でそのまま庚申に定着したともいう。（典拠は同上）

3. 二十三日 月待ち（月祭り）行事の代表的なもの。二十三日講の仲間で行う。



二十三日塔 （三郷下中萱 宮村集会所北隣）



二十三日塔 （豊科真々部殿村）

(1) 二十三日の月待ち

□二十三日講は二十三日の下弦の月の出を待つ行事であり、それに集う講である。

この講は月を信仰の対象にする講であるが、女人中心の講である場合が多い。月については、その満ち欠けが人間の生死や不老不死に大きく関わりとする考え方が、「地上の生命の生殖豊熟の観念と結びついてくる一方、豊熟力の源泉としての雨露や、女性の周期的な生理も月の作用に基づく」という思想も生まれ、ここに母なる大地や水界の象徴たる女性原理としての月という考え方が、広く農耕民の間に根を下ろすようになった」（『世界大百科事典』の「月」の項より）との文化人類学者石田英一郎の指摘がある。二十三日講が女人だけで構成される場合、祈願の内容の中心は妊娠、出産、育児に関するものであるが、それはやはり月と女性の「月の物」（月経）との間に因果関係があると信じられていることによる。また二十三日の「三」は「産」にも通じる。

二十三日講を男性の講とする地区では二十二夜講を女人講とし二十三日講にかえている。二十三日講の本尊は勢至菩薩であるが、二十二夜講の本尊は如意輪観音である。如意輪観音はその女性的

な像容が女性の守護仏としてとりあげられ崇拝されるようになった。

(2) 勢至菩薩

□本地垂迹 旧浦和市(現さいたま市)三室にある月待板石塔婆(文明 17 年<1485>)には勢至菩薩が陽刻され「帰命月天子 本地大勢至」の文字が見える。謡曲『羽衣』(室町時代成立)には「南無帰命月天子 本地大勢至」とある。

□勢至菩薩の「縁日」(民間信仰にみる本尊と縁日の関係) 三十日仏即三十日仏名

(3) 二十三夜の月待ちの事例

□豊科真々部殿村の事例紹介

4. 大黒信仰と恵比寿信仰

(1) 大黒信仰

□概要 大黒天は大国天ともいう。元来サンスクリッド語でマハーカーラ(偉大な黒い者)の意味。マハーカーラは古代インドでシバ神の化身で戦闘神の性格を持つとともに、ビシュヌ神の化身としては厨房の神(財神)とされた。これが密教の伝播により中国に伝わると厨房を守る神とされた。日本へは天台宗の開祖最澄がもたらし、比叡山延暦寺の厨房に祀られた。天台宗の本山である比叡山では地主神を大物主(大国主)とするところから、やがて大黒天と 大国主命とが習合して恵比寿と並ぶ福神となった。(『豊科町誌 別編<民俗Ⅱ>』による) 住職夫人を「お大黒」というのは名残り。

□甲子講の行事 春・秋の甲子の日に行うケースが多い。講の目的は庚申講とあまり変わらず豊作祈願や蓄財の祈願。一部の講には縁結びの祈願を行うところもある。「田の神」的性格をもつ。

(2) 恵比寿信仰

□概要 恵比寿神は元来漁民のものだったが中世七福神の一つに加えられてから商売繁盛の神として都市部中心に広がったが、農村部への浸透はその後で、「農業の神様」として信仰された。お金が貯まる福神との信仰もあった。

□信濃教育会南安曇部会編『南安曇郡郷土調査叢書 第一篇 年中行事編』(昭和 10 年)に見る昔の恵比寿講の状況⇒❖「恵比寿講」は正月二十日を「初恵比寿」といい、各月の二十日に行い十一月二十日を最も祝う。❖正月と十一月の二回の恵比寿講を祝うだけのところもある。❖昔はこの日金を出すのはいけないといって買物などは前日調えた。❖恵比寿講は商家の方が多く祝う。❖豊科や穂高の各商店では福引景品付きで盛んに売り出しを行い、煙火を打ち上げて景気を添え客を呼ぶ。したがって現在では金を出さないどころか安買いに近在から盛んに出掛ける。



大国天と恵比寿(穂高本郷上手木戸)



大国天(穂高有明新屋)



大国天(豊科成相)

5. 観音信仰



百体観音（豊科真々部 金龍寺）



馬頭観音群（豊科重柳）



個人宅の庭先の馬頭観音（穂高有明耳塚）

(1) 観音信仰とは

□ 観音信仰 中野正実先生(郷土史家)の「川西三十四番札所について」(下田忠寿『常念岳の見える里 II』に所収)によると「観世音菩薩は一切の衆生の苦悩を救う力のある仏、その苦悩を救うため三十三種の姿になってこの世に現れ、大衆の祈願をお聞きとどけくださると信じられ、鎌倉時代から一般民衆の間に慈悲の仏として信仰が広まり、多くの観音寺、観音堂が建ち、観世音を本尊とする宗派もできました。」

(2) 観音霊場札所めぐり

□ 日本的に知られたものは西国三十三番札所(第一番札所は熊野三所権現の一つ那智滝にある青岸渡寺)、坂東三十三番札所(鎌倉幕府を開いた源頼朝が三十三番の観音札所を指定したとされる)、秩父三十四番札所の計百番札所。四国八十八所の巡礼も著名。

□ 信濃百番札所（各地にも観音霊場札所設置の動き）

□ 安曇地方にも観音霊場札所めぐり（身近な藩内にも観音霊場札所設置の動き）

松本三十三番札所 第一番 安楽寺(真言宗)〈松本城下和泉町〉

仁科三十三番札所 第一番 若一王子神社観音堂 〈大町〉

川西三十四番札所 第一番 満願寺(真言宗) 〈牧村栗尾〉

□ 観音霊場札所めぐりのかわりに行う百体観音参り 金龍寺、旧仏法寺、平福寺

(3) 法蔵寺の観音様の縁日と狐伝説

(4) 馬頭観音

□ 馬頭観音について

□ 馬への愛が生んだ信仰 家族同様に暮らした。馬は役に立った。

□ 当地におびただしい馬頭観音が見られるが理由は何か

a. 路傍 b. 馬のつくれ場 c. 馬の墓地 d. 個人の家の庭先

6. 市神 鈴市に欠かせない市神

(1) 安曇野に点在する市場と市神祭祀

① 中世都市一日市場の市立ち

a.長徳寺門前の市立ち

b.祭神を事代主命(恵比寿神)とした松本城下宮村大明神(現:深志神社)の1月11日の初市立ちにおける一日市場の「えびすの社人」の役割 → 市は市神を「斎く」市神祭りの場で行う商行為。神官えびす社人は塩をひさぐ。

c.一日市場における、梓神子の役割 正保の大火で一日市場の市が衰退した後、市立ちの権限を失うが、幕末に近い天保9年(1838)になっても梓神子がいたことが記録に見えている。

②成相新田の近世の市立ち 元禄年間に松本藩から成相組唯一の市場として市立ちの権利を与えられ一日市場(長尾組)に代わる市場として市が立つ。成相町には町近郊熊倉街道沿いに津島社祠、新田町には津島社祠があり(円証寺境内)に市神(牛頭天王)を祭祀していたが、六斎市(当初は九斎市)の市立ちの都度、一日市場から市神祭りの司祭者として戎太夫に来てもらっていた。

③中世都市穂高の市立ち

④六日市場の市立ち 三郷の下中萱に明治40年まで八坂神社があったことは中世、下中萱付近が六日市場と呼ばれた市場集落だったことを裏付ける。

(2)豊科の初市開始における市神勧請



市神神輿が休む御旅所 (豊科新田)



市神社 (豊科新田神社)

①八坂神社祭神勧請 明治15年成相町は商業復活の切り札として初市を開催するため警察に許可を求めたところ市立ちには「市神」が必要との指導を受けた。霊力の衰えた津島社を見限り警察の指導どおり京都祇園の八坂神社の祭神素戔鳴命(牛頭天王)を新たに勧請し、津島社祠の場所に八坂神社を設けて翌16年正月15日、16日に初市を開催する。17年には新田町も加わって初市開催。

②成相の市神神輿に続く新田の市神神輿新調 神輿渡御の主導権を握りたかった成相町の意向を無視し新田町も神輿を新調。紛糾したが、町発展のため成相主導から成相・新田共同開催に落ち着く。この一件に近世初頭の成相新田宿開設以降絶えず競り合いを続けた両町のライバル意識が見える。

③飴市 松本に倣う。

7. 蚕神と稲荷との係わり

(1)二系統ある蚕神

□馬鳴菩薩と玄蕃稲荷に代表される稲荷(保食神)の二系統あるが、ここでは純粋な蚕神として茨城県筑波山の蚕影神社の祭神を蚕神としておく。この祭神は保食神の性格であり稲荷と共通。『豊科町誌 別編<民俗Ⅱ>』には「細萱洲波神社境内には<養蚕の神><農業の神>として<保食神>を祀っていることから<保食神>が蚕神の祭神であることが知られる。このことは田沢の藤松冬樹さん宅に

祀られている蚕玉様の祠の中に「蚕玉神社 祭神保食神」とあることから、保食神が蚕神の祭神であることが知られる」とある。

(2) 玄蕃稲荷の初午祭と蚕玉様

□同日の祭祀 「初午と蚕玉様は同日であって分けられない。お稲荷様には蚕玉様と同じものを供える。初午の日、玄蕃稲荷境内にはダルマや縁起物の市が立ち、大きいダルマを買うと蚕が当たるといって、なるべく大きなダルマを買うとされた。この日、柏矢町では飴市を行う」(昭和10年調査)



玄蕃稲荷神社 (豊科細萱)



蚕神文字碑 (下鳥羽本郷)



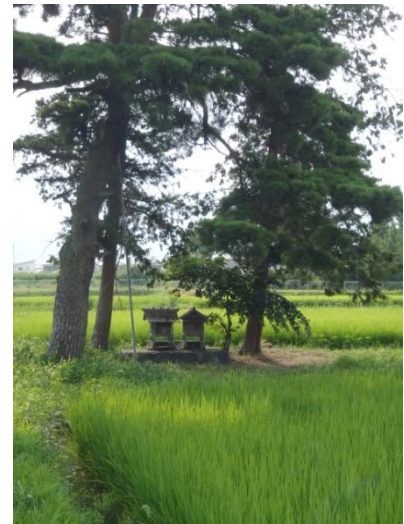
蚕神文字碑 (熊倉春日神社)

(3) 一般的な稲荷信仰

8. 伊勢信仰と戸隠信仰 代参講がともなう



獅子神楽 (豊科田沢 田沢神明宮)



梓川に近い五箇(ごか)に祀られた神明社祠(左)と戸隠社(右)

(1) 伊勢信仰

□伊勢信仰とは何か 伊勢神宮内宮 天照大神 伊勢神宮外宮 豊受大神

□太陽神 農業神のほか水防の神

□代参講としての伊勢講 □御厨 仁科神明宮

□神明系の神社を中心に伝わる獅子神楽 伊勢御師が伊勢信仰普及のため伝授した獅子神楽(悪魔祓)

い)を村祭りに取り入れ定着。安曇地方では大宮熱田神社(旧梓川村北北条)の獅子神楽が著名。

(2)戸隠信仰

□戸隠信仰とは何か 戸隠神社 民間信仰としては豊作の祈りや豊凶を占ってくれる霊場で作神であつた(『豊科町誌』)。

□雨乞いの神としての九頭龍権現 農業に欠かせない雨をもたらす。

信州戸隠神社種兆

綿	小豆	大豆	小麦	大麦	おこ	中	わ	稲	蚕	桑
六分	六分	六分	七分	七分	七分	七分	八分			
オソ霜フル		果実	野菜	雑穀	六分	六分	九分			
		八分	八分	六分			桑			
							八分			

平成四年一月吉日	一月雪雨アリ
長野県上水内郡戸隠山鎮座	二月上旬晴寒強シ
戸隠神社	三月雪雨水。四月小雨。五月晴
	六月晴。七月上旬雨多ク風アリ
	八月熱シテ雨多シ
	九月冷氣作物ヲ害ス
	十月晴。十一月暖雨フル
	十二月暖

月並代参講の祈願祭

4月25日	中	社
28日	宝	光社
5月1日	中	社
6日		
8日		
10日	宝	光社
5月3日		
5日		
12日		
16日	中	社
20日		
6月1日		
15日		
7月1日	中	宝光社
15日	中	宝光社
8月1日	中	宝光社
16日	中	宝光社
9月1日	中	宝光社
15日	中	宝光社
10月1日	中	宝光社
15日	中	宝光社

戸隠神社御祈禱之壘

戸隠神社の種兆とお札

9. 御嶽信仰と有明信仰



御嶽神社の祭場遺跡(豊科熊倉)



有明神灯(豊科吉野)



有明信仰を普及した岡村阜一の生家

(1)御嶽信仰と御嶽講 御嶽登拝信仰は室町時代に始まる。覚明行者は黒沢口、普寛行者は王滝口。

(2)有明信仰と有明講 有明講は天明行者の有明山登頂に始まる。岡村阜一が発展させる。

(3)有明講を確立した御嶽教大教正岡村阜一の活躍 有明山神社を「信濃日光」にする。

10. 念仏講(阿弥陀信仰)



正道の名号塔 (豊科熊倉 霊園)



徳本の名号塔 (明科光 宗林寺)



念仏講が行われた村の堂 (豊科吉野荒井)

(1)念仏講とは何か 念仏には称名念仏と観想念仏の二つの流れ。民間の念仏は称名念仏であり、阿弥陀如来への信仰が根底にあるため「南無阿弥陀仏」と唱える。中世以来、融通念仏の考え方があり、講をつくって村の堂などで念仏講を行う。

(2)念仏講の普及に努めた等順、正道、徳本の三人の遊行聖

①等順(1742～1804) 善光寺別当大勧進住職

②正道(1759 推定～?) 法蔵寺を勧化の拠点とする

③徳本(1758～1818) 「鬼くたく心をまるく田の中に南無阿弥陀仏と月のおもかげ」 日課念仏

11. 社宮司と諏訪信仰



大天白十二社宮司社 (豊科熊倉柳原)



諏訪神社 (堀金下堀)



諏訪神社 (三郷上長尾)

(1)社宮司と御左口神(諏訪上社)との関わり

(2)安曇地方には諏訪神社が多く存在するが、その理由は何か

○中世の穂高神社には南宮として諏訪神社の祭神が祀られ、御柱行事が行われていた。

○豊科吉野(諏訪神社立地)の梶海渡の道祖神御柱は諏訪信仰の影響があるという(吉野 千野義門氏談)